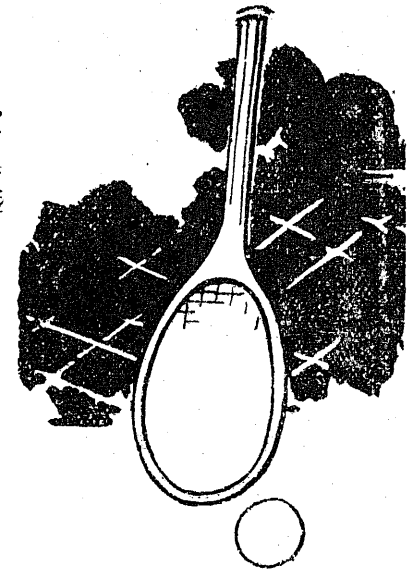

天草洋（頼山陽）

かつら子

雲か山かと眺むれば
　それかわらぬか吳か越か
水か空かもわかぬまで
　同じ色なる青みどり
故郷遠くへだて來て
天草洋に船はてぬ

夕日は沈む西のはて
　烟はなびくとまのかげ
沖を遙かに見渡せば
　魚は波間に跳りつゝ
太白星はさながらに
　月の如くにかゞやきぬ

のこりの薔薇（トーマス、ムーア）

仝　人

一

夏の終に咲き殘る薔薇の花こそわはれなれ
なれがいとしき友どちはなべて跡なくなりにけり
共にうつろふ色を耻ぢかたみに語り慰めて
夏の名殘を惜まんもよるべなき身をいかにせん

二

はかなきなれを只ひとり枝に殘していつまでか
ながめて暮す人やわる、いでや散して先きの日に
なれが親しき友どちの散りて飾りし花園の
寢床の上になれを置き其友人を訪はすべし

三

いとしき友のいにし時吾身もいかで後るべき
愛の光のかゞやけるまとゐの中につれなくも
夜半の嵐のさそひ來てまでゝろこめし友垣を
つれていぬらん時こそは吾身もいかで後るべき

かの燈火は

雨峰生

かの燈火は　人けなき　山のふかみに
世をさけて　朝夕に　白雲のごと
うきなやみ　塵もそまず　暮す堂守の
庵なるらし　秋は野山に　寂にさびて
風たちて　此の頃は　樗杣をはこび
悲さまさる　身にさわる　ねぎをもなく
ひとり住詫ぶ　路に迷ひて　この庵の
思ぞきよし　たづねよる　冬枯の夜半
旅人の　冷たけき　世のわずらひも
灯めざしつ　われも人なり　人の子の
語らへば　熱き血も　熱き情も
消えてわとなし　つれなしと　君ないひそ
堂守として　雫もれど　風ふけば
味にぞすみぬ　靜かなる　夜半の燈
籠れるを
堂守るわれ
雨ふれば
廂とうてど